



●第18集●夏の班長会・班会 平和学習資料

私の戦争体験

いずみ

1996年6月

子供たちの明るい未来のために語り継ぎます

一枚の葉書から

富田市 眞殿 清子

昨年五月、突然一枚のはがきが舞い込みました。それは戦後五十年を記念しての中学校、女学校、合同クラス会の案内状で、もう最後になるかと思ひ、故郷に帰り出席しました。クラス会では卒業以来初めて顔を合わせる方もありましたが、懐かしく、楽しいひとときでした。「男女七歳にして席を同じゅうせず」の時代、別々の学校でありながら何故合同クラス会なのか？それは学徒動員で神戸製鋼所赤穂工場において共に働いた同士というわけからです。瀬戸内海の静かな海辺の浜風の吹きこむ急ごしらえのバラック建ての工場でした。そこでは飛行機の頭の部分を生産しておりました。

昭和三年生まれの私は生まれた時にはすでに日本は中国大陸へ軍を派兵して戦争と共に少女時代を成長してきたといえます。しかし片田舎で暮らしている私たちには戦争という意識はまだありませんでした。それが昭和十六年十二月八日大平洋戦争が勃発した頃から私のまわりが

急に変化しはじめました。この学徒動員も敗戦の色が濃くなってからのことです。セーラー服からモンペ姿となり、勉強などそっちのけで出征家族の麦刈り、稲刈りの手伝いに行くのです。運動場も周囲にぐるりと野菜畑がとりかこむようになりました。肥料桶を担いでの下肥えやりなど慣れない仕事に服を汚物で汚してしまえばそをかけた友もいます。ゴム製品も乏しくなり、それにそなえて藁（わら）ぞうり作りを習ったりしました。また、下着のゴム紐もゴムではなく糸紐にして、ほどけなくなり困ったことなども、いろいろと思ひ出します。

英語の授業も二年生からはありません。そしてとうとう国防色の作業服に、日の丸と神風とが染め抜かれた手拭いを戦闘帽の上から締めて工場へ行くのです。色々の部署がありましたが、私は溶鉱炉から真赤に燃えた砂をいっぱい付けて出て来た製品の砂落しをしました。削岩機、コンクリート等を砕くのに使うようなも

ので、ドド……ブルブル！お腹まで響きます。女学生は主に研磨機での作業。ものすごい勢いで火花が散ります。金槌の先が尖ったようなものでトントンと砂を落します。ドンゴロスの前掛けに砂を一杯入れて運ぶ作業中、ローラーに前掛けを取られて危うく一命を落しそうになったのを、側にいた男子学生が素早く電気のスイッチを切ったおかげで助った友もおります。男子学生は二交替制で夜勤もあったと聞きました。

戦争は日毎に激しくなってきました。中学生は陸軍幼年学校、士官学校、海軍予科練に受験していき、他県からきていた高等学校生は出陣してゆきました。その青年達の姿を私たちは工場で昼休みなど遠くから眺めているだけでした。出陣の前に学生たちは浜で歌ったり踊ったりして別れをおしむのです。海風にのって流れてくる歌声や学生の履く高下駄の白い鼻緒など妙にくっきりと印象に残っています。そしてだんだん見送る人の姿も少なくなってきました。

東に向けて飛んでいくB29を不安な気持ちで見上げる日が多くなりました。神戸、大阪の空が真赤に染まるようになりました。本土空襲が始まったのです、とうとう。

食糧も乏しくなり、工場の弁当も小麦

の入った臭い匂いのするものになりました。お米やさつま芋はもちろん、茎までも求めて町の人達が買いに来るようになり、「今日も艦載機に追われて畑仕事も出来なくなった」とみんなが言っている。母が話しをするようにもなりました。こんな田舎までも。私達が一生懸命作った製品が、駅のホームに山積みされるようになりました。神風を信じ、勝利を信じてきた私達だったけれど「敗けるのは」と思わず声に出さずにはおれないほど不安な日々が続きました。そして昭和二十年八月六日広島、九日長崎に原爆が落とされ十五日終戦。私たちは卒業アルバムも無く卒業しました（フィルムを渡してあった岡山の写真館が空襲で焼けたとか）。汽車通いだっただ友十一人で写した戦闘帽姿の記念写真がたった一枚だけ残りました。

年と共に記憶も薄らぎます。薄らいでいく記憶、薄らいでいく「私の青春」。「あの時代は私にとって一体何だったんだろう？」そう問いかけても薄らいでいく記憶の中から答えはありません。それはとても淋しくつらいことです。同期の中学生は一人も戦死することなく無事帰ってきたとクラス会で聞いたことがせめてもの救いでした。

被爆者救護班の一員として

堺市 岩土 照子

得体の知れない閃光が走り、すぐに「ドーン」という大音響、腹にこたえるくらいでした。「何だ、今のは」。恐ろしい事が起きたと直感、警報が出てない時だから余計思いました。

昭和二十年八月六日の朝でした。看護婦になって四ヶ月目でした。救護班が組織され、私も一員として出勤しました。戸板や大八車に乗せられた人が運び込まれました。小学校が救護所でした。十歳くらいの男の子が妹さんを背負った姿もありました。炎天下に、校舎の中はいっぱいの人。戸板に乗ったまま動かぬ人、床を転げまわり奇声を発している人、時間が経ってくるうちに口唇と鼻腔が腫れあがってうめいてる人、さまざま。多いのは強度の火傷でした。衣服はポロポロに焦げ、血が床をはい、悪臭が鼻を突く、とにかく異常な暑さ。うめき声、奇声が響き、校舎も泣いておりました。

そこへ先輩の声が鋭く刺さる。

「早く患者さんを――」

まず焼けた衣服をハサミで切り離すことから始めた。白と黒の布地の色で、こども火傷の状態が違うものと驚いた。黒地のシャツは焼け焦けているのに、白のランニングシャツは焼けてないのです。白い帽子をかぶっていた人の顔は、影になった部分と光が当たった部分が線引いたようなわだち。黒いモンペの女性や半ズボンの男性は無残だったです。抱き起こそうとすると、ズルっと皮膚がむけるんです。うっかりさわれない。水、水、と叫ぶ断末魔の声にはじかれて汲んでくると、ゴクリと飲み終え、コップを床に落とす。口は半開き、目が私をじっと見ている。何か言おうとしているが声にならず唇が動いているだけ。呼びかけるとガクッとくずれる。筋肉が痛い、刃物で刺されているようだ、と顔をゆがめる人、次の人は水、飲ませてあげたいが無視して進む。

火傷の処置は、オキシドールで洗って

ガーゼでふきとる。次にマキユロで消毒し、そのあと油薬を薄くぬったガーゼを貼る。これしか方法がなかったようです。ガーゼをとる時、皮膚にくっついて患者さんは体をよじり泣き叫ばれるのです。私が看護婦になって初めての、心を鬼にした時です。

異常な使命感に燃え、我を忘れていました。緊張のせいか体が小刻みにふるえ、暑さで汗、緊張で冷や汗、我が体臭に嘔吐しそうな日が続きました。

初めて手術を手伝って、先輩の怒号を浴びたことがあります。眼球が飛び出し、ぶらぶらしている剔出手術があった日、無理な姿勢で消毒布の下から開眼器を持つ役目でした。悲鳴を耳にして、恐怖のあまりに必死で耐えようとしていたのですが、なんと気がついてみたら、私がベッ

ドの上に寝かされていたのです。「眼の手術くらいでひっくり返ってどうするんですよ」。

火傷の患者さん、三日目になるとガーゼの下や皮膚の中からうじ虫がポロポロと出てきました。中には皮膚に喰いついて離れないのもいました。患者さんはそこらあたりが痛いではなく、痒いのだと言われてました。ズルズルするし、悪臭の中、吐き気がしましたが、空腹に奉仕団からいただくニギリ飯を三度毎にいただきます。あの梅干の入っていた大きなニギリ飯、あれほどの美味しい食べ物は今迄に見たこともありません。

広島市内の惨状も聞かされましたが、感傷にひたることなどゆとりがなく、不眠不休で兎の目になっていました。

集団疎開の思い出

羽曳野市 福島美智子

戦争とは苦しへ、かなしく、人間としての生きざる尊厳をすてさってしまうものです。

私は戦争がはげしくなっていた時、国民学校（今の小学校）に勤めておりましたので、その当時の国民学校（特に大都

市)での様子を書きました。

昭和十八年三月、専攻科(現在は短大)を卒業し、四月から大阪市の国民学校に勤務することになりました。学校は住吉区(今の住之江区)で、校区には造船所があり、徴用された人々の子供さんも多く、中には朝鮮(今の韓国)から来て造船所で働く人の子供さんもいました。一学年六クラス。一クラス約六十人でした。それでも教室が足りず、低学年は二部授業(朝からと昼からの授業)で昼前には午後からの授業を受ける児童が廊下などに溢れていました。一年生の担任として一生懸命の毎日でした。国語の教科書にはススメ、ススメ、ヘイタイススメ。音楽では、カタカタカタカタパンポン、カタカタパンポン、ヘイタイゴッコなど、また体操の時は運動場の防空壕を利用して兵隊ごっこをしていました。

次の年からは学校給食が始まりました。パンとみそ汁だけで、パンは今よりまずく、汁の中味は、あげと、とうふぶらひでした。汁を注ぐ杓子は竹製でした。それでも食料不足の当時はとてもおいしく有難いものでした。

児童の服装はモンペ着用、防火頭巾をいつも携帯していました。男子の先生は国民服にゲートルを巻き、女子の先生はモンペを着用していました。

戦争がはげしくなってきた、国民を空襲から守るといふことで、大都市の児童

は田舎へ疎開するようになってきました。田舎に知り合いのない家庭では学校単位の疎開に三年以上が集団疎開することになりました。昭和十九年の初夏から真夏にかけて出発しました。私の学校も南河内郡野田、大草、日置荘(今の堺市)の三村に疎開することになりました。

大草村の会館へは三年生、野田村の四つの寺へは男女別に四、五年生、日置荘村の寺と天理教会へは六年生と分宿し、それぞれ大草、野田、日置荘の国民学校へ午前中登校することになりました。

私も四、五年生、三十名の児童と、寮母、作業員各一名ずつと共に寮主任として赴任しました。当時二十一歳、親も若すぎる先生のもとへ子供達を預けて心配だったろうと思います。食べ物や病気の心配など現在の親や児童にとっては戦争のためとはいえ、想像もつかないし、辛抱できないのではないだろうか。

私も懸命でした。朝からは児童と共に野田国民学校で学習、午後からは寺で復習や裁縫、理科、地歴の補充、その他食糧の調達に走りまわる毎日でした。大阪市に近いので野菜類も少なく近くの農家を廻って集めるのも大変でした。朝食は弁当箱七分目の粥とみそ少々、昼はごは

ん三勺くらいに菜っぱ等の煮付、晩ごはん三、四勺くらいにじゃがいも、大根などの煮たもの、月二、三回は魚や玉子もあったようです。特においしくて忘れられないのは農家に許されて田んぼでとったにしの煮付でした。今ではあのような美味なたにしはありません。食欲旺盛な五年生にはご飯が足りず、食事当番で大釜にごびりついた、こげたご飯を競って食べ、みかんの配給があると(一人一個)外の皮まで火鉢で焼いて食べました。甘いものなど月一、二回、菓子として配給があったように憶えています。

食事の次に困ったのは「しらみ」でした。一週間に二回、北野田駅前の風呂へいくのですが往復軍歌を歌いながら寮から歩いて二十分以上かかり、帰るまでに湯ざめしてしまいます。洗濯もこまめにしていましたがいっつの間にか全員しらみの攻勢に首をあげました。

本堂でみんな一しょに寝るのですが、冷えた足を折りまげやと暖かくなって来たころシャツやパンツの縫い目にかくれていたしらみがゴソゴソとはいまわります。かゆくて、かゆくて寝苦しい日もありました。天気の良い日には寺の縁で、両手の親指の爪をあわせその中へしらみをはさんで殺します。手の指が血で真赤になりました。頭にも毛じらみが発生し、

水銀軟骨という薬をたびたびぬりました。

戦争がますますはげしくなり少年団訓練ということで手旗信号やモールス信号の練習を国民学校でもするようになり、児童と共にしんどい半年でした。大阪市の学校に残っていた一、二年生も集団疎開にくるようになりました。

昭和二十年三月十三日の大阪大空襲は忘れることは出来ません。

六年生は卒業式といふことで自宅へ帰っていきました。その夜のことです。次々と落ちてくる焼夷弾、寮から多くは見えませんが翌朝顔をすすで黒くしながらリュックを負い放心したように歩いている人を数人見かけました。大阪から逃げてこられたようでした。堺市への空襲は本当にこわい思いをしました。焼夷弾が頭上で火花になり落ちてきます。今にも壕の上へ落下しそうで生きた心地はしませんでした。

空襲警報が発令されると児童が眠っていても起こし壕へ入れるのですが、夜来の雨が中になまっていて手足がちぎれる程冷たく痛いので児童は嫌がって入らないのですが、万一のことがあるてはいけないと叱りながら入れるのですが、私も悲しくつらく思いました。

昭和二十年四月には六年生と共に日置荘の天理教会へ移りましたが、無理が重

なり強健を自負していた私もどうとう発熱が続き、しまいには熱が下がらなくなってしまうました。

しばらく休ませてもらいました。その間に広島、長崎への原爆投下がありました。敵機からまかれたビツに「次は大阪」と書かれてあり内心ビクビクの連日でした。

八月十五日終戦の大詔が出てやっとらく苦しい戦争が終わりました。

疎開の児童達もやっと親の元へ帰ることができました。

戦争って誰が得をするのでしょうか——。誰もみんな苦しく悲しい思い出が一杯です。

人間として最も大切にしたい「いのち」もかえりみず生活せねばならないのです。

戦いにたおれた人、傷ついた人、自決していった人、家を焼かれた人、父や母わが子や夫を亡くした人、戦場だけでなく銃後といった国内で、また戦場になった南方の島々や沖縄で——

戦争ってあってはならない。してはならないのです。今、日本は平和で有難いことです。しかし今この地球上には平和にはほど遠い国もあります。

世界の国々から戦争をなくし明るく平和な緑の世界、美しい地球が永久に続くよう努力したいものです。

私の戦中記

富田林市 大島 露子

昨年は戦後五十年という節目にあたり、戦争体験者が少なくなってきた現在、私も語り部として伝えておきたい思いが一杯あったが、平成七年と言う年は阪神大震災、オウム事件等であわただしく過ぎた。「マインドコントロール」と言う言

葉が日常的に使われているが、私も軍国主義という一見愛国主義とも思われる思想に完全にマインドコントロールされていた子供時代、学生時代を考えてみると、今更ながら慄然とする。

私が生まれた昭和四年から昭和二十年

までは、日本の歴史は戦争によってぬりつぶされていた時代である。満州事変・支那事変・大東亜戦争（いずれも戦中日本が使っていた用語である）すべてアジア独立、弱者救済、平和を得るための聖戦と教えこまれたたきこまれた。現在の様な情報収集が出来なかった時代、私達は唯一ラジオから流れる戦争遂行者達にとって都合のよいニュースや映画館でみる兵隊達の汗と努力と勝利の映像だけをみせられつづけた。私達は子供心に「欲しがりません勝つ迄は」を合言葉にだんだんと戦局のきびしくなる中で粗食に耐え、学業をほろり出して軍需工場に、また女でも軍事教練にせいを出していた。戦争の後半はとも十四歳とは思えぬけなげな心意気であった。だがその時、どれ程悲惨な目に合って生命をおとした人達が沢山いたことか。

そして自分もまた目の前に死があった。昭和二十年三月十日東京大空襲があり、大阪の市街地に住む私達にも大空襲は必至と思われたが、本当はそれがどんなものであるかを実感出来るような情報はなかったし、大人達も戦時下の生活を黙々と送っていた。十三日、二十三時頃に空襲警報のサイレンが鳴り、私は今まで通り防空頭巾をかぶり非常用力パンをかけ、防空壕に家族ととびこんだ。もうその時

上空をB29の爆音がゴウーゴウーとし、あちらこちらから焼夷弾の炸裂する轟音がひびいた。私は防空壕からとび出し、演習していた通り近所の中学生達と梯子で屋根にのぼって消火活動をしたが、すぐ下の窓からパッと火の手が吹き出したので下から呼ぶ声と共に火の粉を浴びつつ降り逃げたが、その時はもう一面火の海で逃げる道もない有様であった。ただ一つの逃げ道は川へ入る事だった。川の水は湯となり、木の橋は落ちて燃えながらただよって来る。すすと煙で目はあけられず、熱風で息も出来ず、髪の毛はチリチリと焼けた。「みんなここで死ぬんだ」と誰かが叫ぶ声だけきこえた。何時間そうしていたのだろうか、阿鼻叫喚とは正にこの事である。少し火勢が衰えて川からゾロゾロはい上った時「朝の九時だ」と言う声が出て、この灰色の暗い中に火勢だけがあちこちで燃えたりくすぶったりしている。今が朝なのだと解った。

そしていつの間にか母の手をしっかりと握っている自分が生きている証拠であった。身体の弱かった母、どんなに苦しかっただろう。それから郊外の親戚の家まで歩いてたどりついた時はもう夜になっていた。途中どれ程死んだ人を見ただろう。死んだ人をふみわけて歩いた。少しも恐くはなかった。それから八月

の終戦の日まで、今度は爆弾の被害やら機銃掃射の恐怖等を味わった。日本中戦場と同じであった。すぐそばに死があったが、その日その日を私達は青春を重ね合せて生きていた。

現在であれば何事がおこっても最低でも保障してもらえ、また訴える事も出来るが、あの時私達は何も償ってもらう事も無く全てを無にした。私は終戦と共に最愛の母と全ての持物とそして学生生活を失ったのだ。終戦と共に今までと百八十度回転した思想にとまどいながら

生きて行けたのは、考える暇もない飢えと母を失った悲しみとに逆にささえられていた様に思う。戦争体験と言っても人それぞれに違っだろうが、とにかく戦争で得る物は何も無い。現在世界各地でもりもなく起っている紛争、また政治の混乱、いじめ、青少年の犯罪、高学歴者のオウム問題、エイズの被害 etc……今何をしたらいいのか、隣人を愛すること、これが一番手近な平和への道だと思ふ。

平和のシンボル 私の宝物

堺市 居町 一郎

今、私がこの原稿を書いている机の上に一個の文鎮が載っています。三人の兵士が大きな爆弾を抱えて敵陣に向かって走っている鑄造で、右横書きに肉弾三勇士の像と書いてあり、六十年前も前の小学生の頃キャラメルのサービス券を集めて貰ったものです。

子供の小さい頃や四人の孫達にもこの話をしたとき、はじめは自分の体に爆弾

をくくりつけ敵陣破壊のため自爆することが理解できずそばをむいていましたが、今ではこの文鎮から反戦と平和がいかに大切かを知るようになりました。

平和と反戦を力強く訴えているこの小さな物言わぬ文鎮を何よりも私の宝物として、三人の兵士の冥福を祈りつつ子孫孫に伝えていくつもりです。

私は今から五十一年前の八月十五日、

中国大陸満州の奉天（現瀋陽）で航空通信兵として敗戦を迎えました。その日の奉天は灼けつくように暑く、真赤な太陽が地平線の彼方に沈むのを涙して眺めていたのを今も憶えています。この日から死と直面する私の苦難の四年四ヶ月が始まった訳です。

これより一週間前の八月八日、今まで友好国と信じて和平斡旋まで依頼しようとしたソ連が、俄然反旗を翻してソ満国境を踏み越えて怒濤の如く侵攻してきました。

八月十五日、戦局を図り知るすべもない若い兵卒の私はきまじりにくい玉音放送の意味も分らず、涙を流す部隊長等の動静から敗戦を知りました。

最初にソ連兵を見たのはそれから二、三日過ぎた頃です。全員が兵舎の前で隊長から話を聞いており、当番に当たった私は兵舎内を見て廻っていました。

どこから入って来たのか雲をつくような大きな五人の男女兵と鉢合わせになり、びくくりする私に「倉庫を開ける服をくれ」とゼスチャーで要求します。肩から吊したマンドリンのような自動小銃が今にも火を噴きそうです。私は「ここは壕を掘るシャベルの倉庫で服は無い」と地面を掘るまねをしましたが、彼等の身に着けた軍服は汚れて異臭を放っています。

男も女も大きなケーキのような物を持ち指でつまんで食べています。

私はロシアと言えばトナカイの曳くそりに乗ったサンタクロース、赤々と燃えるペチカを連想して大きなケーキだと思ったのですがこれがなんと途中の畠から持ってきたひまわりの種だったので。

要するに彼等は長い戦争で衣服も食糧も性にも極限まで飢えていた訳で、これが敗戦後の在満邦人に少なからぬ不幸と悲劇をもたらしました。

それから毎日のように三人、五人とソ連兵が来て酒を出せ時計をくれ万年筆をくれと言ってくる。出せばまた来るし出さねば暴れます。もちろんこれらは軍規をおかした私的な行動ですが、敗戦の惨めさを知りました。

もめごとを起こすなど言われていたので取っておきの酒を出したところ、十五、六歳の少年兵三人が目の前でラッパ飲みし、二、三分で一升瓶を空にしたのには驚きました。

また、その日の午後ふらりふらりと一人が入ってきたよっぱらい兵がサイドカーをくれといい、エンジンがかからないと大暴れ、みかねた元気のよい若い下士官が「隊長やりますか」と軍刀の柄に手をかけたが、さすが隊長は「がまんしろ、お前一人では済まないぞ」と穏やかに

に諭し事なきを得たが、腹の中は煮えたと思いました。

しばらくして兵舎を明け渡し、山手の方にテントを張り、野営の生活が始まりました。

南の方の泰天にソ連軍が着くまでに戦争が終わったので、銃声もあまり聞かずに平穏でしたが、国境に近い所では大混乱。覚悟のできている軍人はまだしも、何十万人もいた開拓団や滿州開拓青少年義勇隊に大きな犠牲が出て、子供を知人の中国人に託した残留孤児の親の心も察しられます。

ある日、上司の指示で中国服を着て二人で街の様子を偵察に行き、悲劇を目撃しました。山樞を中国人の娘が必死で逃げて行き、それを巨漢のソ連兵が追いかけます、それはサバンナでジャガーに追われる小鹿のようで、たちまち追い詰められ草原に組み伏せられました。こんな光景を見るのは初めの最後で戦争の惨い一面です。今でも肉食動物が狩りをするテレビには目を背けます。

北の方から死の逃避行をしてきた家族の集団は、母親が子供達の手首を紐でくくり、その端を束ねて鵜匠のように持っています。夜、河を渡るときこうしないと流されるからと聞きました。それでも向こう岸に着いて見ると、紐の先がもぬ

けのからになっていた人も大勢いたと話してくれました。

これは終戦の直前、男という男が残らず現地徴収されたことも原因です。私はこれらの人達に「軍隊におれば必ず捕虜としてソ連に連れて行かれ、死ぬまで働かされる。家族を装って子供達を連れておれば見逃がされる」と同行を誘われました。それは男女とか性の問題でなく、生か死を賭けた必死の説得だったと思いますが私には上司とか逃亡という言葉が頭から離れず断りました。

その後、この集団に食事や洗濯のサービスに若い女性を出せとの要請が進駐軍からあったとき、母親達は断固拒否し娘達の頭を剃って男装させ、奉仕は自分達で出たことを聞かされました。

山のテント生活も次第に不穏になり、何回か夜襲に遭いました。命こそ奪われませんでした。食糧や燃料を根こそぎ持って行かれ、明日の食事に困る日がきました。

まもなく武装解除され、自動小銃を持った監視兵のいる学校などに収容されました。

父祖伝来の日本刀の軍刀を取り上げられた士官が、先祖に申し訳ないと家族を道づれに自害した一件に私も涙が止まりませんでした。

ソ連軍の指示で二千名ごとに編成され、何十両もの貨車に詰められて泰天駅を出ました。

貨車はどんどん北進しているのに、監視兵も日本の上司もウラジオストクから日本へ帰るのだと言います。

開拓団のお母さん達でも捕虜になると言っていたのにも思った私は、集結場所の図書室から持って来た日露事典を暇があれば読んでいました。

ソ連に入って一日貨車を降り、軌道の広いソ連の貨車に乗り替えのため野営したときは、あわよくば帰れるのではと一沫の夢を抱き、穴を掘って焚火した跡に毛布を広げ周囲から足を入れたが、九月のシベリアの夜は寒くてなかなか眠れませんでした。

ふと見ると周囲の暗闇に沢山の眼がキラキラ光っています。一人六十キロもある荷物を持った私達を原住民が狙っています。獲物を狙うハイエナの集団そっくりで、何人か被害に遭いましたがなすすべもありません。

再び貨車に乗せられ、ウズベク共和国の首都タシケントへの四十七日間の旅が始まるが、今なら豚や鶏の家畜でもあんな輸送はしないと思います。ソ連が提供しているのは空っぽの貨車と機関車だけで一滴の水もトイレもなく、途中に川で

もあると臨時停車し、ソ連兵は上半身裸で横一列になって水を割り冷水摩擦しているが、日本人は見るだけで身震いしています。

食事は停車した荒野で飯盒炊さん、トイレは動物並、薬も持たぬこの長旅で私は二十日間もアミーバ赤痢にかかり、再び日本の土は踏めない覚悟しました。

輸送司令官は、何はともあれ、息をしている日本人二千名を無事目的地に運ぶことを使命としているので、一人でも死者が出るとすぐ沿線から連れて来て人数合わせをやりませす。私の知人でも一度離隊して人数合わせにつかまった人も大勢いました。

仲良しの同年兵があごの骨がはずれ、食事が出来ずやせ始めました。私達は停車の都度各貨車を訪ね整備してくれる人を探したが果たせず、途中のソ連の病院でもいいから入れて欲しいと言った本人の希望もソ連側がゆるさず息絶えました。センバラチェーンスクと言う駅の近くで戦友達で土葬しました。

合掌した私達が踵を返したとたん、駆け集った住民達が掘り返し一糸残さず衣類を剥ぎ取ってしまいました。

ソ連には六十万人の日本人が連行され悪条件下の強制労働で約十割、六万人が死亡したと言われています。

私達は温暖な中央アジアの、しかも工場勤務だったため死者も少なく済みましたが、極寒のシベリアでの伐採では多数の死者が出てとても十割位でなかったと思います。

あとがき

私は昭和六十一年、ソ連シルクロードの旅行で、抑留中一緒に働いた少年工を訪ねてタシケント駅裏の機関車工場へ会いに行っただけです。ロシア人に個人的に恨みはなく、人道的に接してくれた人には今も感謝しています。

しかし抑留中、高学歴の二十歳代の技師に「なぜ直接ソ連と戦ってない日本人

を大勢連れて来て何年も帰国させないのだ」と質問したところ「一九四一年六月ノルウェーなど四ヶ国を制したゲルマンがソ連に侵入してモスクワ危しと国家の存亡を賭けているとき、日本は関東軍特別大演習の名のもとに七〇万の軍をソ満国境に動員してわが国を牽制したときは、ヤポンスキー・カントンスキアールミヤ（日本の関東軍）をドイツ以上に恨んだ」と静かに話しました。

戦争を放棄して半世紀が過ぎました。これからも万難を排して平和を守っていかねばならないと思います。

母の思い出

堺市 土崎 史子

戦後五十年と一口にいつてしまえば終りですが、私にとっては今でも父が生きていたら、母の苦勞も少しは救われたと思います。父は佐賀県の生まれで八人兄弟の末子で、大阪で紳士服の仕立職人でした。母も佐賀県の生まれで、出生してすぐに母親を亡くしたそうです。すぐに

子供のない夫婦の養子になり育てられました。子供の頃の母は、学校から帰りましたら冬でも火鉢に当らしてくれなかった。内職を手伝い、手は冷たいので息を吹きながらしたそうです。私が生まれ、膝に抱いてましたら怒られたと話してくれました。弟が二歳あいて生まれました。

昭和二十年、戦争が激しくなり、夜もよく起こされ家族五人で防空壕に入り、避難したことが何度もありました。私は神戸で生まれ神戸で育ちました。神戸も空襲がひどくなり、三月に焼夷弾を落とされ遠くまで焼野原になりました。父は両親に会いに行くといつて一人佐賀に帰りました。そこから徴用にとられて工場に仕事にいつてました。幼い私と弟と祖母と、奈良県のあやめ池に親戚を頼って疎開しました。大阪の鶴橋の駅で空襲警報に遭い、駅の階段で三人で伏せていました。子供心にいつ死ぬかとも思っていました。親戚の家といつても蔵の中で電気もついてません。暗い部屋で、夜は煎った大豆一握をお椀の中に入れ、塩を少々入れお湯を入れ、それが夕食です。昼は毎日南瓜の煮物です。弟と二人でいつても手を取りあって、お母さんに会いたくつて恋しかったです。

奈良の家の庭で弟と遊んでいましたら、祖母に日本が戦争に負けたと聞かされました。私は神戸のお母さんが迎えに来てくれる、母に会えるといつれいつて頭の中は母の顔でいっぱいでした。神戸の家は、火の粉が飛んできては、祖父と母で守っていたそうです。私は六歳でした。父は夜勤をして会社を出て帰る道で長崎の原爆に遭い、死にました。父の顔も

覚えてません。写真だけです。戦争の映画を見て父を描いていました。

戦争は終わったけれど、母の人生戦争はずっと続いてたと思います。新しい父は妹が一歳のとき亡くなりました。今の時代と違って女の人には仕事がありません。電柱に広告を貼る仕事をしていました。私が糊を入れた缶をさげて、母と二人でしたことを覚えてます。奈良の百姓の手伝いに二週間留守にします。私が弟と妹の母親代りです。私が小学校に入学の時、母が帯をほどいて蝶のアップリケのついたカバンを作ってくれました。靴はありません。ゴム草履です。母は自分が食べなくても子供に食べさせてくれました。昼も夜も働きつめなのに、私達の食事も手作りです。服もいつもアイロンあてて着せてくれました。羨は敵しかったです。父のない子といわれないための、母の愛の鞭です。そんな母が世界一大好きで、作文では母のことばかり書いていました。またよく歌ってくれた『里の秋』は私の大好きな歌です。

一九九五年一月十七日、私は神戸の須磨区で地震に遭い、埋れていたのを怪我也もなく助けられました。夜の十時三十分頃長田区から出た火によって私の町も焼けてしまい、五十年前の戦争の焼野原です。パジャマだけです。なにかも無

くし、思い出も子供の写真も頭の中はまっ白。でも二月六日より、生きる為と自分で自分にいきかせて、いやがる主人を引っぱって堺市のマンション管理人を夫婦でしております。私も子供がいたから、災害に遭っても頑張って生きていく。母が私たち姉弟がいたから、あの苦しい戦後を一人で生きてきたのと同じよ

うに。母の生き方を見て生きてきたから頑張れたと思います。母は五十一歳で他界しました。子供を育てるために、毎日の生活で精一杯だった母。道端で死んで骨もないという父のために毎年八月九日にはお茶碗一ぱいのごはんをそなえている母の姿を今もおぼえています。

一二も戦場

河内町 谷口 敦子

ひとつの詩を通して戦争の恐ろしさと悲惨さを思い出してみました。

「<戦場>はいつでも海の向こうにあった。海の向こうのずっと遠い手とどこかないふじうにあった。

ここは<戦場>ではなかった。へじぶんの家<で喜んでいた。少しの食糧とよごれたモンペを着て動きました。

海の向こうの<戦場>では生死をかけた兵隊たちは戦った。

若者たちは勝って帰ると勇ましく…の声に送られて戦場へ旅立って行きました。

そのころの私達学生は学徒動員という名のもとに軍需工場でプロペラの部品作りをしていたのです。この人達は老いも若きも働きました。千人針に武運長久を願い乏しい配給の食べ物に絶え、ひたすら海の向こうの戦場の人たちのことを考え辛抱にあげられました。

ここまでは戦争は海の向こうにあり戦場は遠いところだったのです。

「いまその<海>をひきさいて数百数千の爆撃機がこの上空に殺到し焼夷弾が投下されている。それは空中で一度炸裂し一発の焼夷弾は七二発の焼夷弾

に分裂しすさまじい光箭となって地上にたたきこまれる。戦場でないこの地上へ…」

わたしは昭和二〇年三月十七日神戸の大空襲に遭ったのです。神戸は細長い町です。

山の手と海岸線に照明弾が投下されたのです。くっきりうかびあがった町の上空を編隊を組んだB29がゆうゆうと現れ従横無尽に焼夷弾をおとし町々を焼いて行ったのです。ザザ…シュシュ…とすさまじい音をたて雨のようにふりそそぎ地上につきささったのです。必死で消しました。でも外へ出た時は火の海。一斉に全部の家から煙と炎が吹き出ているのです。やけつく熱さの中はうようにして水にぬらした防空ズキンをかぶり炎と煙のない方へ家族とにげまわったのです。

幼児を胸に血を流して倒れている母親、泣き叫ぶ子供、けがをして動くことのない人、それはそれは地獄絵のようでした。

「夜が明けた、見わたすかぎり互礫がつつき灰燼が白く煙をあげてくすばっている。異様な吐き気のある臭いが立ちこめている。しかしここは<戦場>ではなかった。

単なる<焼け跡>にすぎなかった。ここで死んでいる人たちをだれも<戦

死者>とは呼ばなかった。ここで死に傷つき家を焼かれた人たちをただ単に<罹災者>という名で片づけられた。

ここがみんなの町が<戦場>だった。凄惨苛烈な<戦場>だった。

わたしの家は神戸の三ノ宮の駅まで五分という便利のいいところに住み父は歯科医だったので。そのころ医者には疎開するのむづかしかったようです。都会から医者が少なくなり過ぎることを防いでいたみたいです。

父は自分をかえりみず人々のために町会長として精いっぱい働いていたのです。翌日互礫の山悪臭の中を自分の家の焼け跡をさがして歩きました。あちらこちらから煙がたちこめ火の手がパーッとあがるのです。電柱が電線にぶらさがりくすぼり続けていました。歯科のユニットがひっくりかえりただの鉄くずになっていました。

逃げおくれで亡くなった方々の遺体をまた防空壕でむし焼きになった人々を男の人たちが黙々と運んでいました。言葉では言いつくせない悲惨なものでした。その遺体は焼け残った小学校の廊下に安置され身寄りの方々がさがしに來られ引きこって下さるのを待つのです。それこそ涙の対面でした。

行くところの住むところが見つかるまで

その小学校の別棟の教室の中で雑魚寝なのです。乾パン少々と毛布一枚借し与えられたように思います。汽車の切符は手に入らないし適当な田舎の知人はなし、連絡の方法もつかないままなしくづくめの中でどうにか生きていったのです。

さいわい私は父にもめぐり合い、ゼロからの出発で必死に働き生活をたてなおして下さった両親のおかげで生きながらえることができたのです。三ノ宮駅の構内付近では孤児になり飢えと栄養失調で野垂れ死んだ浮浪児がたくさんいたそうです。布引の上の寺で茶屋に付され無縁仏として納骨堂に納められたとか胸が痛みます。平和に暮し住んでいたみんなの町がこの戦いでもっとも悲惨苛烈な「戦場」になったのではないのでしょうか。

ここまでは戦中前後の話なのです。そのあと続いた長い長い戦後の苦しみ

は語りつくすことはできません。それは言語に絶する暮しでした。その言語に絶する明け暮れの中で人々は体力と精神力のぎりぎりまでもちこたえてやっと生きてきたのです。

親を、兄弟を、夫を、子を失いそして家は焼かれ財産をなくし、朝も昼も夜も飢えと戦いながらどうにか生きてきたのです。

戦中戦後をただ黙々と歯をくいしばって生きてきた人々が何に苦しみ何を食べ何を着てどんなふうに着てきたか、どんなふうに住んでいったのかほとんど記録に残されることも少なく忘れ去られようとしています。

書きたいことは沢山あります

ほんの一部にしかすぎませせん

次の世代の人々に語り伝えなければならぬ事かも知れないと思っています。

実弾射撃訓練も

堺市 山本八重子

私が女学校に通っていたのは昭和十年代の前半です。まだ戦争はそんなにひどく

くはなかったのですが、日本は国をあげて軍国教育をしていました。学校の授業

は軍事教育がおもでした。英語は敵国語ということまで教えてもらうことはありませんでした。慰問袋作りもしました。慰問袋というのは、千人針や手紙を入れたもので、戦地の兵隊さんをはげますために作ったものです。女学校の時一度だけですが、練兵場に行って実弾の射撃練習をしたこともあります。

昭和十八年に結婚しましたが、一年もたらずに主人が徴用にかかり広島県の呉の軍需工場へ行きました。私はそのとき妊娠していましたが、一人になるのが心細くて、主人がいつ帰ってこれるのか判らず不安で不安でたまりませんでした。徴用中の昭和十九年秋、主人に三度めの召集令状がきました。呉から帰ってきたその足で任地に行ってしまうました。

当時私は、大阪の都島に住んでいました。毎日のように警戒警報が鳴り、空襲警報が鳴る時もありました。夜、警報が鳴ると電球の傘を黒い布で覆って家の外に明りが漏れないようにして待機。警報が解除になるとやれやれと布を捲るという日々でした。昭和二十年三月十三日、大阪大空襲がありました。都島からは赤い火の粉が空から落ちてきて大阪の町が焼けているのが見えました。私の親元が日本橋にありその夜燃えていたのですが、そのときはまさか実家が燃えているとは

夢にも思いませんでした。焼け残った物が都島までとんできていました。翌日、実家に行ってみると土蔵は土の山、防火水槽にはガラスの溶けたものがぶら下がっていました。実家で焼け出された妹のはなしでは、道を火の玉が転がってきたとのこと。もう、大阪は危ないと言うことで、私は知人をたよって子どもをつれて姉と共に奈良県に疎開、母と妹は、岐阜県に疎開しました。疎開している間に、都島の家は六月十日の空襲で焼けました。二度の大きな空襲で私のものはすべて燃えてしまいました。疎開していたので私自身は幸いにも怖い目にはあいませんでした。

昭和二十年八月十五日、ようやく終戦になりました。主人は終戦のとき和歌山県に居り、九月になると奈良の疎開先に帰ってきてくれました。戦後の食料難や物不足は子供がいたから大変でした。配給だけではやりくりがつかず、道端の草を摘んで食べたこともあります。「いつになったら白いご飯が食べられるのか」とずっと思っていました。

今は孫たちが、私が戦中過ごしたくらいの年齢になっていますが、平和に自由に暮らしていてうれしいです。この子たちには私たちが経験した戦争を絶対に体験させたくありません。

誰にもしてほしくない、 してはならない・ソ連抑留の体験

大阪狭山市 戸松 進

長い人生において、人、それぞれにドラマがあります。私も五十年前に、それはそれは苦しい体験をいたしました。未だに自分が、どうしてあのような試練に耐えられたのかわかりません。

満州で敗戦を迎え、落ちつかない日々を送っていた時、沢山のソ連兵が来て、武装解除、兵器弾薬・食糧など一切没収された。その後、程度の低い兵隊がやって来て、無抵抗のわれわれに何日も略奪が続き、丸裸同然にされてしまった。しかし、しっかり者は身の回り品はちゃんと隠して持っていた。

間もなく、その日の糧にも四苦八苦、残された食べ物は病馬、負傷馬の肉のみであった。一頭、二頭と殺し、二週間余で数頭の馬の姿が消えた。小刀も持たない殆どの者は、この時点からマイナスになった。

やがて、警備兵に追われるように長い道中が始まった。その道中には沢山な兵

士の死体が転がっていた。馬の死体もあった。

何日も野宿をした後、塹をめぐらした河原に出た。そこには大型バスが停っていた。そして、バスの中に一人、また一人と消えていった。誰も出てこなかった。不安が広がる。しかし、誰一人として騒ぐ者はなかった。ひたすら、順番を待った。「狙(まないた)の上の鯉」である。死を目前に控えて両手を合わす者、お母さんと小声でつぶやく者、様々なれど、不思議なくらい落ち着いていた。

順番が来て中に入る。素っ裸になり、白い粉を振りかけられた。DDTだった。ソ連領に入る前の消毒だ。終わった人達は砂の上に寝転んでいた。それを見た時、すっと気力が抜けた。

しかし、やがて、誰もが味わうことのない出来な極悪非道な奴隷生活が始まるとは誰一人も予知しなかった。

小人数ずつ分散収容所(物置小屋同然)に入れられた。ダニ、シラミが体中に、

皮膚はカサカサになった、そして臭い。

食べ物「じゃがいも」一日一個の時も。しかし、作業(伐採)は容赦なく毎日続いた。もう、体力の限界に来ていた。

ある日、作業中に大きな悲鳴が起こった。タポール(柄の長いマサカリ)で自分の左手首を切り落としていた。名も知らぬ男だった。ソ連兵が来て連れ去った。その後の消息は分からない。

その頃から、壊血病、鳥目(夜盲症)、栄養失調者が続出、みな夢遊病者になっていった。夕方、作業を終えての帰途、

「お手々、つないで、野道を行けば」と歌い出すのが常になった。鳥目で見えないうのだ。つないだ手はお互いにふるえていた。目はギョロギョロ、体は骨と皮だけ。

今、思い出しても涙が先に立ちます。このような体験は、今後、誰にも、してほしくないし、してはならないと思えます。

まだまだ、抑留の体験記は沢山ありますが、これ位で幕といたします。

ああ電灯の明るいこと

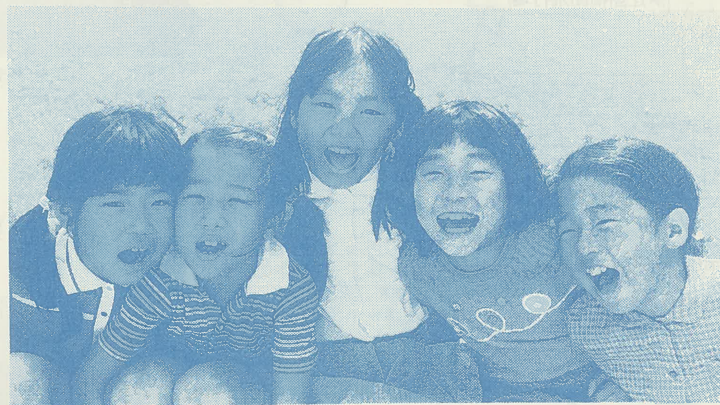
堺市 仮屋ヒサ子

昭和十九年から二十年といえは、私は十三・十四歳頃で当時はもう戦争が激しくなっていましたから、学校の授業はほとんどなく勿論英語などは教えてもらえませんでした。それどころか外来語はすべて日本語に変えてつかっていました。

また、そのころ、健康な男の人は兵隊に行っていましたから、工場は人手不足だったのでしょう。授業の代わりに学徒

動員として軍需工場にいきました。私は大阪府堺市に住んでいましたので家から毎日工場に通いました。昭和十九年秋から二十年夏のあいだに三回動員に行きました。一つは、補助タビという工場でした。軍服のミシンがけの部分縫いの出来た物をあつめ次の工程に持って行くのがおもな仕事でした。二つ目は、鉄工関係で何の部品かは判らないのですが万力

'96 夏の班長会・班会
平和学習資料



いま日本は平和ですか?.....28・29
 こんな米軍基地が、日本に必要なの?.....30・31
 厳しさ増す暮らしと増え続ける「軍事費」.....32・33
 「日米安保共同宣言」で広がる国内外の不安の声.....34・35
 オキナワ、そしてヒロシマ・ナガサキから51年.....36
 忘れてはならないアジアへの侵略.....37
 視野を広げて世界を見ると.....38・39
 子どもたちの時代——21世紀を平和な世界に.....40・41
 黙っているのは、平和は守れない.....42・43
 ごはんを食べるように平和の活動を!!.....44・45
 夏の平和活動をみんなの力で前進させましょう.....46・47
 資料(日本国憲法、日米安全保障条約).....48

「私の戦争体験 第18集」

部品をはさんでヤスリがけでした。三つ目は、弾丸の検査。手に持てる位の大きさの弾がケーツに合うかどうかを見ていました。お国のためほしがりません勝つまではとがんばりました。作業中に警戒警報が鳴ると作業をやめて会社の防空壕に避難し、空襲警報が鳴ると自宅に帰るように指示されました。機銃掃射に遭ったこともあります。パイロットの顔が見える位の低空飛行で屋根すれすれに飛行機が降りてくるようでした。バリバリバリという大きな音も聞こえ、身の縮まる思いでした。

当時の持ち物は布製のかばんに身の回りのものを入れ、防空頭巾は絶対には離されませんでした。また服に住所、名前、血液型を書いた名札を付けていました。夜寝るときは枕元にかばんを置き、すぐに逃げ出せるように着のみ着のまま寝ていました。日夜、焼夷弾がキラキラと輝きながら落ちてくる事が多くなり、そのときは母と一緒に風の向きを考えて逃げてました。近所の家は焼けましたが幸い自宅は焼け残りましたので、自宅には焼け出された人々が入りやすくなりました。

戦争中、食料は配給制度で少ししかなかったのに庭に野菜を植えたり、にわとりを飼っていたときもありました。大豆

や芋の入ったご飯や、ぞうすい、すいとんを食べていました。妹は、学童疎開で河内長野にいき、弟は、縁故疎開で新潟県に、父は徴用で砲兵工廠に勤めていてほとんど家に帰ってこなかったため、家には私と母の二人だけで家族はバラバラになって暮らしていました。

終戦になって、もう電球に黒い布を掛けないでいいようになった時、電気がこんなに明るかったのかと感ぜうれしかったです。今のこの明るさがどうかずっと続き、平和な世界であるよう願います。